
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ Hidden The Fact ~

フォルネウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ~ Hidden The Fact ~

【Nコード】

N4007Z

【作者名】

フォルネウス

【あらすじ】

何処にでもいるような普通の高校生「甲野カズキ」。当たり前の生活が続くと疑いもしていなかったカズキは、ある日の学校帰りに突然事件に逢ってしまふ。

事件後、目が覚めたカズキがいたのは全く知らない場所だった。そしてカズキは、自身もまだ知らない自分の『真実』に翻弄されて行く……。

『魔法少女リリカルなのはStrikerS』の二次創作です！
一部、『なのは』とは違う作品のキャラや設定が登場します。
初めての作品なので駄文だらけだと思いますが、よろしく願います！
感想や指摘、アドバイス等大歓迎です。
ただし、度を越えた批判はご遠慮下さい。
不定期更新になるかもしれません。ご了承ください。

プロローグ 全ては唐突に（前書き）

初めまして！

初めての投稿なので、色々と駄文が目立つと思いますが、読んで頂けると嬉しいです。

では、『魔法少女リリカルなのはStrikers ～Hidden
n The Facts』

……… 始まります。

プロローグ 全ては唐突に

ここは、どこにでもあるような普通の町の大通り。

人が行き交い、道路には車が走る。

そんな町中を、1人の少年が、家路を急いで……といっても、至ってゆっくり歩いていた。

「あー、疲れた〜。」

少年の名は『甲野カズキ』。

高校1年生……つまり16歳である。

別段優等生でもなく、かといって落ちこぼれでもない、至って普通の少年。

ただ1つだけ普通ではない所があるとすれば、1人暮らしである事だろう。

カズキは物心ついた時には孤児院に保護されており、親の顔も知らない。

孤児院では虐待なども無く幸せに暮らしていたが、高校生にもなってお世話になりっぱなしなのは悪いと思い、今は1人暮らしである。それでも家賃は孤児院の院長が払ってくれている。

カズキはアルバイトをしているが、それだけでは食事代だけで精一杯なのだ。

「ちくしょー……、何だかんだ言ってもう7時だよ……。」

実は現在の時刻は午後7時15分。

カズキは先程まで学校で友人の手伝い（強制）をさせられていた。そのせいで疲労困憊。

走りたくても走れない。

あと、物凄く腹が減っている。

「さっさと帰りた…。こういう時は近道だな」

そう言つて、カズキは大通りから少し奥の路地に入った。

外灯が少なく、人通りも無いに等しいが、家までは一番の近道だ。

「……………暗い。」

今更な感想を口にしつつ、カズキは歩いていく。

カズキが路地に入ってから数分後。

「うん。家まであと少し。しかし、腹減った…。帰ったらのんびりテレビでも見ながら晩ご飯食べよ。」

そう言いながら歩いて行くと、1人の人影がこちらに向かってくる。黒い帽子とサングラスのせいで、顔が全く見えない。

「あれ？この通りに人がいるなんて珍しい。」

そう呟きながら、カズキがその人影とすれ違った…。いや、「すれ違おうとした」瞬間…。

「……………ッ!？」

カズキは腹に違和感を感じ、直後に激痛を感じてその場に倒れた。

「あつ…づつ!? (い、一体何なんだ…!?)」

正直、思考が追いつかない。

よく見ると、すれ違った人影…おそらく男性だろう、その手にナイフが握られている。

(なるほど…。刺されたって訳か…!)

その証拠に、腹からはおびただしい量の血が出ていた。

カズキが状況を理解した時、男は元来た方向に歩いて行く。

カズキはそれに気付いていない…いや、気づける訳がない。

腹を刺された痛みは形容し難いものだ。

最悪なことに、カズキは動く力が残っていない。

よりにもよって、今この場にはカズキと、たつた今去って行った男しかない。

ただでさえ人がいないのだから、誰かが発見してくれる可能性など絶望的だろう。

(ダメだ…動けない…。僕は死ぬのか…?仕方ないかな…。でも

…まだ院長に恩返しできて無い…。嫌だ…こんな…ところ…で…

……………)

そこで、カズキの意識は途切れた。

「……………づつ……………」

あれからどれくらい時間が経ったのか。カズキは目を覚ました。

……………大事な事なのでもう一度言おう。『カズキは目を覚ました』

のだ。

「あれ…？確か、僕は腹を刺されて…倒れて…！？」

カズキは現在の状況に驚愕した。

無論、生きている事に対してではない。

あの後、偶然通り掛かった誰かによって救急車を呼ばれ、病院で治療を受ける可能性は十分にあるのだから。

しかし、この状況はあまりに異常だった。

まず最初に、傷が完治している。

いくら病院でもあの傷が完治するはずがない。

少なくとも痕は残るはずなのに、傷など初めから無かったかの様に跡形もなく消えている。

続いて二つ目は、現在の服装である。

刺された時は学校の制服を着ていたはずなのに、今の服装は普段着。しかも普段からカズキが着ていた物とまったく同じで、血痕も無い。

そして三つ目、恐らくこれが一番異常だろう。

それは現在地だ。

辺り一面、見渡す限りの森。

まるで青木ヶ原樹海ではないかと思う程の森が広がっている。

「何なんだ…ここ…。」

カズキはこれ以外に言葉を

発することなどできなかつた…。

プロローグ 全ては唐突に（後書き）

プロローグ、終了です！

カズキ「いや、ちょっと待て。」

どうかした？

カズキ「どうかしたじゃ無いよ。なんか意味不明だし、『なのは』の要素全然無いし、僕はいきなり殺されかけるし！」

仕方がないだろ。

それに、あの犯人だって後々重要な役割を果たすんだから。

カズキ「はいはい…。」

次回から本格的に話が進みます！

今回は『なのは』の世界観には無くてはならない物が登場します。もしかしたら、2人目のオリキャラが登場するかもしれません。

カズキ「皆さん、よろしくお願いします！」

それでは…

『ドライブ・イグニッション!!』

第1話 戸惑い・出会い・そして戦い（前書き）

ようやく本格的に物語の開始です。

しかし、無理矢理ぶち込んだ感が凄い…。

それでは…

『魔法少女リリカルなのはStrikerS ～Hidden Th
e Fact～』

……… 始まります。

第1話 戸惑い・出会い・そして戦い

学校の帰り道にいきなり刺されたカズキは、『気が付けば森の中にいる』と言う異常事態に混乱していた。

「もう訳がわからない…。傷は治ってるし、服装は変わってるし…。そもそもここはどこ?」

カズキは周囲を見渡すが、やはりどこを見ても青々とした葉をつけた木が生い茂っているばかり。

「あーもう!どうすれば良いんだよ!」

カズキは地面に仰向けに倒れ込む。

「はぁ……。本当にこれからどうしよう…」

現在地が解らなくては帰りようが無い。

そもそも、カズキの住んでいた場所は都会の真っ只中。

周辺にここまで広大な森林など存在しない。

つまり…。どう頑張ってもカズキは歩いて家には帰れないのだ。

「……………なんか、考えるのも疲れてきた…」

カズキは思考を放棄しようとする。
しかしその時…。

《……………た……………スター……………》

「!?!?」

カズキの頭に女性のよな声が響いた。

「な……何？」

《マスター……マスター……！》

「この声……。どこから？」

声が徐々にはつきりと聞こえてくる。

《マスター……聞こえますか？》

「聞こえるけど、一体誰？どこから話してるの？……て言うかマスターって……？」

《ここです。あなたのポケットの中です。》

「ポケット？」

カズキはズボンのポケットの中を探る。

すると、エメラルドグリーンの正八面体の宝石があった。1つの頂点に取り付けられた金具に鎖が通され、ペンダントのようになってる。

「宝石……？」

『初めまして、マスター。やっと見つけて頂けましたね。』

「うわあっ！？」

カズキは驚いて尻餅をついてしまう。

「ほ……宝石が……喋った……！？」

『すみません。驚かせるつもりは無かったのですが……。』

「いや、驚くよ普通……。」

とりあえず、謎の喋る宝石と話す事にした。

「えーと…、君って一体何なの？」

『私はデバイスです。名称はフォルクスと言います。』

「デバイス…？」

『魔導師が魔法を使う為の媒体です。』

「………??？」

魔導師だの魔法だの、話がさっぱりなカズキ。

『…もしかして、知らないのですか？』

「知らないも何も…。そもそも、どうして僕が君を持っているのがさっぱり…。」

『やはりですか…。』

「え？」

『私は何故かあなたがマスターとして登録されていて、どうしてここにいるのか解らないのです。』

「………。」

この答えはカズキにとって予想外だった。

デバイスがどういう物なのかはわからないが、人工知能か何かで意思が有るのならば、ここがどこなのかを聞くことができると思っていたのだ。

しかし、これでは質問などできない。

「まあ、お互いに何も知らないみたいだし、話し相手ができるのは嬉しいからね。よろしくね、フォルクス。」

『はい。ところで、これからどうするのですか？』

「うーん…。とりあえず、現在地が解らないとどうしようも無いからな…。とにかく森から出よう。」

『了解です。』

カズキはフォルクスを首にかけると、立ち上がって歩き出そうとする、が……。

ガサガサッ！

「！？」

近くで音が鳴った。

「何だろう？」

『気をつけて下さい。』

「うん。」

カズキは周囲を警戒する。

ここは森の中。

猛獣などが出てきたら一大事だ。

「何も……来ない……？」

『しかし、近くに生体反応があります。』

「そんな事も分かるの!？」

『はい。』

「その反応があるのはどこか教えて？」

『了解!』

フォルクスの案内にしたがって森の中を歩いていく。

『この近くです。』

「えーと……ん？あれは？」

カズキの視界に映ったのは、倒れている人影。

「人だ！」

カズキは人影に駆け寄る。

「あの、大丈夫ですか？」

倒れていたのは、明るい茶色の髪の少女だった。身長から考えると、カズキと同じ年か年下くらいだろう。どういう訳か服装はボロボロである。

「気絶してるのかな…？」

『そのようです。』

「どうしよう…。森の外に町があれば病院に運べるんだけど…。て言うか、その前に森を出ないと。」

しかし、目の前で倒れている人を見捨てる訳にはいかない。カズキは少女を連れて行く事にする。

「よいしょっ…と。」

『大丈夫ですか？』

「大丈夫だよ。一応、体力には自信があるから。」

そう言って、カズキは少女を背負った。

そしてそのまま森の出口を探そうとした、その時…。

『気をつけて下さい！何か来ます！』

「え？一体なにが…うわっ!？」

カズキが言い終わる前に、青白いレーザーが飛んで来た。

幸い、カズキの横に着弾した為ケガは無い。

「今度は何！？」

その問いに答えるかのように、灰色のカプセルのような機械が20体ほど現れた。

「嫌な予感がする……。」

カズキの予感は的中する。

機械は突然、カズキの足元にレーザーを発射した。

カズキはとりあえず全速力で逃げるが、少女を背負っている為、速度が出ない。

しかも機械は浮いている為、物凄いスピードで追いかけてくる。

「これじゃ追い付かれる……ヤバッ！」

カズキの目の前に大木が現れる。

カズキは衝突しないように足を止めてしまっ。もう逃げる事は出来ない。

「……絶体絶命……かな。」

機械はどんどん近付いてくる。

『……マスター。』

「なに？」

『その人を地面に降ろして、私を持って下さい。』

「い、いきなり何を言って……？」

『お願いします。』

「……分かったよ。」

どのみちこのままではどうする事も出来ないので、フォルクスの言う通りにする。

「で、どうすれば良いの？」

『「セットアップ」と言って下さい。』

カズキは少し考える。

「……どうなるか解らないけど、やるしか無いかな。……セットアップ。」

『Set up.』

いきなりフォルクスが眩い光を放ち、カズキはその光に包まれる。

そして光が収まると、そこには姿が全く変わった……。『バリアジヤケット』を纏ったカズキがいた。

「これは……？」

先程まではグレーねTシャツに青いジーパンだったカズキの格好は、青い長袖のシャツに黒いズボン、白い半袖のコートに変わっている。両手にはフィンガーグローブがはめられ、腕にはガントレット、スネにはアングレットが装備されている。右手には一振りの両刃剣が握られている。

「この姿は……？それに、この剣は……。」

『どうやら成功のようですね。』

剣に取り付けられたエメラルドグリーンのコアが点滅し、声が聞こえる。

その声は……。

「もしかして、フォルクス？」

『はい。一緒に戦いましょう。』

「戦う…？」

カズキは少し戸惑うが、後ろに寝かせた少女を見て決心を固める。

「……分かったよ。行こう、フォルクス！」

『はい！』

カズキはフォルクスを両手で握り、機械の軍団に突っ込んで行く。機械はカズキにレーザーを放つが、それを全てフォルクスで弾き、機械に斬りかかる。

しかし、機械はカズキの攻撃をかわし続ける。

「くそっ！当たらない！」『ですが、初めての戦いでこれだけの動きは凄いです。』

確かに、カズキの動きには素人離れたものがある。

現に、雨のように放たれるレーザーをほとんど回避し、避けきれない物は全てフォルクスで弾いている。

その為、今のところ被弾はゼロ。

しかし、このままでは危険だ。

カズキの体力は無限では無い。

このまま動き続ければ、いずれは体力が尽きて動けなくなるだろう。カズキは知らないが、バリアジャケットを纏っている間は大抵の攻撃からは身を守る事が出来る。

しかし、万が一ダメージが通ってしまえばそこで終わりだ。

カズキはなんとかしてこの状況を打開する方法を考える。

(剣じゃ攻撃が当たらない、逃げる事も出来ない、どうすれば…。)
『マスター！後ろです！』
「！！」

カズキが振り向くと、一体の機械が少女にレーザーを放とうとしていた。

「させるか！」

カズキは少女を攻撃しようとしていた機械を攻撃する。

レーザーの発射体制だった機械は避ける事ができず、真っ二つに切り裂かれた。

「間一髪…！でも、どうする……。」

未だに機械は19体いる。

(飛び道具……ミサイルみたいに敵を追いかける武器があれば…。)

カズキの足元に円形の魔法陣が出現し、周囲にエメラルドグリーン
の光の球が出現する。

『これは…？』

(たくさんの敵を追いかけて、纏めて撃破する…！)

光の球が猛スピードで動き出し、機械に命中する。

光の球…否、光弾は一瞬だけ何かに阻まれるが、それを突き破って
命中した。

同じようにして、他の機械にも光弾が次々と命中。

瞬間に機械は全滅した。

「ハア…ハア……お、終わった…？」

『はい。敵は全滅です。お疲れ様でした。』
「うん…。」

バリアジャケットが解除され、フォルクスもペンダントに戻る。
カズキは少女の無事を確認すると、その場に座り込んだ。

「…あれ？そう言えば、さっきの光の弾は何だったんだろ？」

『もしかして、無意識の内に魔法を使ったのですか？』

「魔法…？あれが？」

『はい。』

「…全く考えて無かった…。」

『それは…凄いです。』

「とりあえず、少し休もう…。疲れた…。」

カズキは森を出る事を一時中断し、この場で休憩する事にした。

同時刻、別の場所。

「謎の魔力反応って、本当？」

「うん。場所は、聖王教会の近くの森の中。ガジェット反応もあったんやけど、すぐに消えてもった。」

「なるほど…。とりあえず、現場に行つて状況を確認しないと。」

「私も行くよ。」

「2人共ごめんな。試験の監督が終わったばかりなのに。色々やることもあるやろ？」
「大丈夫だよ。やることと言っても直ぐに終わるし。」

「そういう事。それじゃ、行つてくるね。」

「うん。2人共気い付けてな。」

カズキのいる場所に、2人の女性が向かっていた…。

第1話 戸惑い・出会い・そして戦い（後書き）

今回の話で違和感を持った方、正解でございます。

カズキ「どういう事？」

実は、わざと少しおかしくした場所があるんだよ。

カズキ「何で？」

君の異常な能力やその他諸々の伏線。

カズキ「…いやちょっと待ってよ。確か僕ってチートじゃ無いんだよね？」

チートでは無いけど、異常ではある。

カズキ「うーん…？」

リリなのファンの皆様は、今回登場した機械が何か分かりますね？

今回はカズキがあの人達と出会います。

そして、今回登場した少女の正体が少しだけ明かされます！
それでは次回もお楽しみに

『ドライブ・イグニッション！』

第2話 遭遇、そしてもう1人の少年（前書き）

予定していた展開まで進まなかった…orz

しかも超短い……。

それでも良ければご覧下さい。

『魔法少女リリカルなのはStrikers ～Hidden
the Facts』

……… 始まります。

第2話 遭遇、そしてもう1人の少年

カズキは木陰に座って休憩していた。

目の前には、未だに気絶したままの少女が横になっている。

「…それにしても、この子はなんで倒れてたんだろう？」

『誰かに襲われたのでしょうか。』

「この深い森の中で？それに、何も無いのにいきなり襲われる訳…
…あるか…。」

カズキは自分という実例があるので否定できない。

「まあ、詳しい話はこの子が目を覚ましてから聞けば良いや。」

『はい。』

そう言いつつ、カズキは先程の戦闘の事を考えていた。

（さっきの技、僕が考えた通りの攻撃だった…。使った事の無い技
をあそこまで思い通りに……………。）

『マスター、誰か来ます！』

「！」

カズキは周囲を警戒する。

戦った直後である今、敵に襲われでもしたらひとたまりも無い。
何があってもすぐに逃げられるようにする。

そうしていると、女性の声が聞こえてきた。

「えーと、魔力反応があったのって確かこの辺だったよね？」

「その筈だけど……………あ！」

女性が何かを発見したらしい。

(やっぱり僕を探してる……………？)

カズキは少女を背負って逃げようとするが……

「あ、その人、止まってくれませんか？」

「何もしなければ危害は加えません。」

……………無理だった。

正直、全力で走っても逃げ切れる自信は無いので、カズキは言われた通りにする。

しかし、警戒は続ける。

と言うか、警戒心むき出しである。

「……………」

「うーん……、ここまであからさまに警戒されるとは思わなかった……」

「まあ……、仕方ないよ。」

カズキの前に現れたのは2人の女性。

1人は、栗色のツインテールに白い服を着ており、もう1人は、金髪のツインテールに黒い服と白い上着を着ている。

白い服の女性は先端部が金色で赤い透明の球体を取り付けられた杖を、金髪の女性は柄の長い黒い斧をそれぞれ持っている。

「……あなた達が誰なのかは分かりませんが、僕はこの子を病院に運ばなきゃいけないんです。邪魔しないで下さい。」

「……あれ？《管理局の事を知らないのかな？》」

「《次元漂流者ならあり得るけど……》」「《ともかく、話を聞かないと。この大量のガジェットの残骸の事も含めて。》」
「《うん。》」

とはいえ、カズキは未だに警戒を解いていない。

このままにらみ合いが続いてはラチがあかないので、フォルクスが助け船を出す。

『あの、どうやらお2人は魔導師のようですが……。』「そうだよ。そう言えば名乗って無かった……。管理局機動六k……。」

「ちょ、ちょっと待ってなのは！ 私達の所属、まだ六課じゃないよ！」

「あ……、さっきまで六課の話をしてたからつい……。では改めて、時空管理局航空戦技教導隊所属、高町なのは一等空尉です。」

「同じく時空管理局、フェイト・T・ハラOWN執務官です。」

2人の女性……なのはとフェイトはカズキに（と言うよりフォルクスに）自己紹介する。

「……時空管理局……？」

「やっぱり知らないんだ……。」

「という事はやっぱり……。」

「次元漂流者かな……。」

「……………???？」

カズキはもはや何が何だかわからなくなっていた。

その頃、カズキ達がいる場所とは別の森の中。

ここに、カズキよりも少し背が高い少年と小学生くらいの少女が立っていた。

少年は紺色のローブを纏っていて、その中の詳しい服装は外からでは伺い知る事は出来ない。

少女はピンクの服に白いスカートを身に付け、淡い茶色の髪には蝶を模したような髪飾りを付けている。

少年は小さな手鏡を持っており、その手鏡が光を放ち、空間に画面のような物を投影している。

その画面の中には1人の女性が映っており、少年はその女性と話している。

「……………で、封真さんがあいつをこの世界に送り届けたと…。何やつてんですか、あなたは。」

『何が？』

「『何が？』じゃ無いですよ。封真さんが連絡をよこしてくれたから良かったものの、何も知らないあいつをこの世界に1人で置き去りにしてどうするんですか！」

『なんで私に言うのかしら？』

「惚けないで下さい。封真さんに頼んで、あいつをこの世界に送り届けさせたのはあなたでしょう？」

『さあね それにあの子は大丈夫よ。だってあの子は…………。』

「…………まあ、そうなんですけどね。それでも、何かあったら大変です。とりあえず、僕はいっつを捜して、何かあったら助けますよ。」

『分かったわ。それじゃ、頑張つてね。…………あ！それから！』

「何ですか？」

『その世界の1級品のお酒を探して……………』

「届けませんよ！？あなたはいい加減にその酒癖をなんとかして下さい。四月一日わたぬきがかわいそうです。」

『酒癖を直すのは無理な話ねー』

「……………そうですか。じゃあ後で何かお酒を送りますから、くれぐれ

も飲み過ぎないで下さいよ。」
『りょうかい』

光が収まり、少年は鏡をズボンのポケットに収納する。

「まったく、侑子さんは楽天的過ぎるんだよ……。」

「でも、親しみやすい。」

「確かにね……。とにかく今は、あいつを捜すのが先決だね。封真さんが場所を教えてくださいなかつたし、よりによって連絡がつかないし……。ま、頑張ろう。」

「うん。」

少年と少女の2人は森の中を歩いて行った。

第2話 遭遇、そしてもう1人の少年（後書き）

やっぱり短い…。

しかも前回は予告した所まで行けなかった…

カズキ「ちゃんと予定を立てないから…。」

反省しています…。

でも、こうしないと非常に中途半端な状態になりそうだったので…。

さて、今回の話で『もう1人の主人公』と『魔法少女リリカルなのは以外のキャラ』が登場しました。

全員の名前は出してませんが、どんな作品のキャラか気付きましたでしょうか？

カズキ「分かり辛いと思うけど…。」

ですよー…。

えー、今回の失敗を踏まえ、へたに次回予告はしない事にします。

という訳で、次回も読んで頂けると嬉しいです。

『ドライブ・イグニッション！』

第3話 次元の魔女と稀代の魔術師（前書き）

今回の話は、カズキ達がいる世界とは違う世界での出来事です。その為、『リリカルなのは』の要素はほとんど登場しない上、例によって短いです。

その代わり、CLANPの作品を知っている人は良く分かる人物が登場します。

読みづらい方もいらっしやるかもしれませんが、ご了承下さい。これが無いと話が進まないんです…。

それでは……

『魔法少女リリカルなのはStrikerS』Hidden
The Facts』

……始まります。

第3話 次元の魔女と稀代の魔術師

。ここは、カズキ達がいる世界とは別の世界にある『願いが叶うミセ』

それ相応の対価を支払えばどんな願いも叶えられると言う店である。そしてこの店の主人は、例えどんなに歪んだ願いであっても、対価さえ払えばその願いを叶える。

もちろん、それがどんな結果をもたらすのかを警告はするし、覚悟のない者の願いは叶えない。

そんなこの店の主人とは、先程まで森の中にいる少年と話していた『吉原侑子』である。

一部の人物からは『次元の魔女』と呼ばれる彼女は、今は店の中にある和室で煙草をふかしてくつろいでいた。

「~~~~」

「どうしたんですか侑子さん？」

侑子に話しかけたのは、この店でアルバイトをしている『四月一日君尋』である。

彼は『アヤカシ』が見えるという特殊体質で、侑子の目の前で『アヤカシが見えなくなればいい』と願ってしまった為、店でこき遣われる羽目になった。

余談だが、店での格好は割烹着である事が多い。

「いや、どんなお酒が来るか楽しみで」

「またリヨウ君にお酒を頼んだんですか!？」

リヨウと言うのは、先程侑子と話していた少年の名前である。

本名は『篠崎リヨウ』。

とある理由により様々な異世界を旅している少年である。

リヨウは最近仲間が1人増えたのだが、それが小学生くらいの女の子だったため、侑子に散々からかわれている。

侑子がリヨウにお酒を頼むのはいつもの事なのだが、そのたびに侑子がベロンベロンに酔っ払うため、四月一日はうんざりしていた。

「いい加減にして下さいよ…。飲んだくれて酔っ払った侑子さんの扱いは大変なんですから……。」

「まあまあ、そう言わずに。」

四月一日は、誰のせいだよ、と思いつつ、別の部屋を掃除する為に歩いて行った。

「……………それにしても、封真はちゃんとあの子を送り届けてくれたみたいね…。あの世界は未だに『彼』の手が及んでいない数少ない世界。しっかりと守らないとね……。さて、あなたはどのようなかしら？……………」

侑子は手に持っていた煙草を置き、『ある男』の名前を口にした。
その『男』の名は……………。

「……………飛王^{フエイワン}・リード……………」

「…ふん。魔女も余計な事をしてくれたものだ。」

ある世界に存在する自らの根城で、ため息混じりに声を漏らした男

がいた。

言葉では表現し辛い髪型で、右目に片眼鏡を掛けたこの男……『飛王・リード』は巨大な椅子にふんぞり返り、目の前に設置された大型の鏡に映された映像を見ていた。

その映像とは、カズキがなのはとフェイトの2人と遭遇した時の物だ。

「災いの種は早めに摘んでおこうと、手駒を使って殺させたというのに……。まあ良い。『ゆりかご』とか言うものが手に入れば、あの世界に用は無い……。その後はあらゆる世界の理を壊し、『クロウ・リード』すら成し得なかった魔術を完成させ、あの男を越える……！」

飛王は再び映像を見る。

「その前に、今の最大の障害であるあの小僧を消さなくてはな……。」

すると、1人の女性……『シンフォ聖火』がやって来た。

「……あの世界にも、羽根があるみたいですよ。」

「そうか……。一石二鳥と言うものだな……。」

飛王の表情は、邪な笑みで染まっていた……。

第3話 次元の魔女と稀代の魔術師（後書き）

さて、読んで頂いてありがとうございます！

???「イエーイ」

カズキ「……あのー、作者？」

ん？

カズキ「この謎の生物…何？」

ああ、これは今回の話に関連して来てもらった『モコナ』ソエル』
モドキ』だよ。

モコナ「白モコナ参上！」

カズキ「ア、アハハ…。」

さて、今回は物語の裏側の不穏な動きが明かされました。

モコナ「侑子も出てきた〜。四月一日もなつかし〜」

前回から登場したけどね〜。

モコナ「それじゃ、モコナは小狼達シヤオランのところに帰るねー」

了解、じゃあね〜。

カズキ「……結局何だったの？」

さあ？

カズキ「ええええ！？」

次回はカズキサイドに戻ります、これは確定。

次回はどこまで行けるかな……。

て言うか、もう少し1つの話を長くしないと……。

このままじゃ短すぎる（汗）

では、至らない所だらけのダメ作者ではありますが、次回以降もよろしく願います！

『ドライブ・イグニッション！』

第4話 伸ばされた魔の手（前書き）

今回はリヨウの活躍が少し多めです。

それでは…

『魔法少女リリカルなのはStrikers ～Hidden
the Facts』

……… 始まります。

第4話 伸ばされた魔の手

なのはとフェイトの2人と遭遇したカズキはしばらくの間警戒心むき出しだったが、フォルクスの説得と2人の説明でとりあえずは納得した為、今はヘリの中で話を聞いている。

ちなみに、ヘリに乗っている理由は『任意同行』。

もちろん、未だに目を覚まさない少女も一緒である。

「……………つまり、僕は異世界から何らかの理由で飛ばされてきて、ここは『ミッドチルダ』っていう世界……………って事ですか？」

「そうなるね。」

「理解できたかな？」

「……………すみません、何が何だか……………」

「……………だよー……………」

なのはもフェイトも理由は解るので、無理に理解は求めない。

「それにしても、あそこまで大量のガジェットを倒しちゃうなんて凄いや。」

「戦闘経験なんて有るわけ無いのにね。」

「あれには自分でも驚いてますよ……………」

『映像記録を残してありますが、ご覧になりますか？』

「お願いしようかな。」

「……………フォルクス、いつの間になんかそんな事を？」

『戦闘と平行して記録しておりました。何かの役に立つと思いましたが……………』

「……………つくづく驚かされる……………」

カズキ達は先程の戦闘の映像を見る。

「凄い…。ガジェットの攻撃をほとんど避けてる…。」
「なかなか筋が良いね。」

そして映像は、カズキが射撃魔法を使用する場面になる。

「これは…、デイベインシューターだね。」
「頭の中で攻撃をイメージしたら、いつの間にか使ってた…。」
「まあ、大体の魔法はイメージで決まるから。こういう事も珍しくは…って、ええっ!?!」
「嘘…!!?!」
「?」

なのは達が映像を見て驚いている。

「カズキ君、これ普通に撃った?」
「『普通』の基準がわからないんですが…。」
「ああ…ごめん。」
「何かおかしい所があるんですか?」
「魔力弾でガジェットが破壊されてる…。」
「へ?」

カズキは意味がわからなかった。

弾を撃つただから、当たれば破壊されるのは当たり前ではないか。

「とりあえず、はやてちゃんとも話さないかね」
「なのは、何で目が輝いてるの?」
「誰かド素人でも分かるように説明して下さいー!!!!」

カズキはまったく訳が分からないまま、どこかへ連行されて（拉致

られてしまった……。

その頃……。

「アイリス、この辺りから反応が？」

「うん、間違いないよ。」

リヨウが仲間の少女……『アイリス』と一緒に森の中で何かを探していた。

「飛王に見つかる前に回収しないと……。あーもう、やる事がたくさんあるのに……。」

「仕方ないよ。」

「……奴の目的は『あらゆる世界の理を壊す』事……絶対に頭のネジが1000本はプツ飛んでるな……。」

「確かに、正気の沙汰じゃないよね……。」

2人は森の中を見渡す。

「あ！リヨウ、見つけた！」

リヨウはアイリスが指差した方向を見ると、木の枝に白く光る美しい『羽根』が引っ掛かっていた。

「ありがとう。よし、さっさと回収して……！？」

リヨウが何かを感じ、周囲を見回す。

すると突然空間が裂かれ、中から黒い人型のロボットのような物が

現れた。

手には3本の長い爪のような武器が装備されている。

「……………飛王の差しがねか……………」

リヨウは服の右腕の袖をまくり、中に隠れていたブレスレットを出す。

ブレスレットには青い宝石のような物が取り付けられている。

「とりあえず、一気に潰す！行くぞ、ファーブニル！」

『Yeah』

「セットアップ！」

『Set up』

その瞬間、リヨウが光に包まれる。

そして光が収まると、黒いシャツに黒いズボン、ダークグレーに紫のラインの入ったコートという組み合わせのバリアジャケットを纏ったリヨウが立っていた。

両腕には少し大きめのアーマーが装備されている。

「ライト・モードセイバー、レフト・モードブラスター。」

右腕のアーマーには刃が装着され、左腕のアーマーには銃口が出現する。

「さあ、少し眠ってる！」

リヨウはロボットの軍団に向かって左腕の銃から魔力弾を連射しながら突っ込んで行く。

「うおおおお！」

ロボットを右腕の剣で次々に切り裂いていく。

「これじゃ、どこぞのウイルスの方がよっぽど強いな！」

リヨウは難なくロボットを撃破していく。

「これで最後！」

そしてロボットは全滅した、が……。

「！？やべっ！」

いつの間にか背後に出現していたロボットが爪をリヨウに向けて振り降ろそうとしていた。

しかし……。

「バンブーランス！」

突然地面から竹槍が出現し、ロボットを貫いた。

リヨウが声のした方向を見ると、白いマントを身に付けて仮面をかぶった少女がいた。

「リヨウ、油断は禁物だよ。」

「あはは…、助かったよアイリス。」

「うん。」

少女の正体はアイリスだった。

リヨウとアイリスは元の姿に戻る。

「しかし、いよいよ危なくなってきたね……。早くあいつを……。カズキを捜しだして合流しないと……。」

「うん、急ごう。」

「……と、その前に。」

リヨウは木の枝から羽根を取るとブレスレット……リヨウのデバイスである『ファープニル』に収納した。

「小狼さん達、大丈夫かな……。」

「小狼達なら大丈夫でしょ、みんな強いからね。今度会ったらこの羽根も渡さないよ。」

「そうだね。」

リヨウとアイリスは再び歩き出した……。

第4話 伸ばされた魔の手（後書き）

今回もグダグタだー

カズキ「遂に頭が壊れたか作者？」

そんな事は無い！

リョウ「どうでも良いけど、表現がもったいぶり過ぎだと思っただ。

「アイリス「私とリョウなんて、初登場の時に名前が出なかったし…。

こういう書き方はっかり思い浮かぶんだから仕方ないだろ！

さて、アイリスがなんの作品のキャラか判りましたでしょうか？
ヒントは…

- ・ 蝶型の髪飾り
- ・ リョウの『ウィルス』というセリフ
- ・ 『バンブーランス』が登場する作品とは？

…です。

どうしても判らない方や答え合わせをしたい方は、感想かメッセージまで！

それでは次回もお楽しみに！

『...イングリッシュ・ライブラリー』

第5話 見習い起用(前書き)

ここまでこぎ着けるのに大分かったな…。

それでは……

『魔法少女リリカルなのはStrikers } Hidden
the Fact』

……… 始まります。

第5話 見習い起用

カズキはなのはフェイトと共に、ヘリである建物に運ばれた。

先程までここでは『陸士Bランク試験の結果報告』なる物が行われていたらしいが、当然カズキは何の事やらさっぱりだ。

「とりあえず、報告がてらにはやてちゃんの所に行こうか。」

「そうだね。あ、その女の子はとりあえず医務室に連れて行こう。ちゃんとした所で休ませてあげないと。」

少女を医務室に運んでから、3人は『はやて』という人物の元へ向かう。

ちなみにその道中では…、

「そう言えばさっきの女の子、リインフォースに似てなかった？」

「言われてみるとそうかも。」

「でしょ？顔つきとかなんとなく……………」

「……………」

カズキは再び取り残されたとき

「ほー、君がさっきの魔力反応の正体だったんか。」

「…………あの、失礼ですけど、関西出身ですか？」

「良くわかったなあ。もしかして地球出身？」

「ここは地球じゃないんですか!？」

はやてに会って早々に、カズキは声を上げてしまった。

自分の知らない場所と言う事は解っていたし、異世界だと言う事も聞いていたが、改めて聞かされるとやはり仰天する。

「もう絶対に帰れないじゃないか…。」

「（（あちゃー…））」

『もしかしたら帰れるかもしれない』という一握りの希望を粉碎され、まるでこの世の終わりのような表情をするカズキを見て、3人は念話で相談を開始する。

「《どうしようか…。この子間違い無く次元漂流者だし、放っておく訳にはいかないし…。》」

「《そうやねー…、あ！それなら六課で保護するとか！》」

「《そ、それって大丈夫！？》」

「《平気や。1つくらい部屋は余るし、なんなら見習い起用扱いにでもすれば何とかなる。私は見とらんけど、なかなかの腕前なんやろ？》」

「《そうそう！たぐさんのガジェットを一気に倒したみたいだし、育てるなら私が！！》」

「《なのは、ちょっと冷静に…。》」

「《にやはは…、ごめん…。》」

「《それにしても、大丈夫かなそんな裏技。》」

「《大丈夫や。既に六課は裏技の塊やないか。》」

「《はやてちゃん自覚あつたの！？》」

「《ちょっと驚き…。》」

「《2人共そのツッコミ何！？》」

「《と、とにかく！カズキ君は私達で保護するってことで良いの？》」

《

「《うん！それでオーケーや。》」

話が纏まったので、とりあえずカズキに話を切り出す。

「え、えーと…カズキ君？」

「なんででしょうか…？」

「（うわー、凄い表情やな…。）とりあえず、カズキ君は私達で保護する事にするよ。」

「……へ？」

「カズキ君、異世界から飛ばされたんやから住む所が無いやろ？もうすぐ私の部隊が始動するから、良かったらそこに住んでええよ…ってことや。」

「…でも、迷惑じゃないですか？それに、部隊って事は何かの組織でしょう？僕は部外者ですから…。」

「いや、ガジエットをメツタメタにした時点で部外者ではなくなっているような物なんやけど…。」

「え！？」

「それは冗談として、困ってる人は見過ごせないってだけや。まあ、出来れば見習いか何かになってくれると嬉しいかな…とか考えとるけど。」

「見習い…それだけで良いんですか？」

「うん。」

「困った時はお互い様だよ。」

「………分かりました。それでは、宜しくお願いします。」

「うん！これから宜しくな！」

話が纏まった時、タイミングを見計らったかのように部屋の扉が開き、誰かが入ってきた。

「はやてちゃん！書類の整理、終わっただですよ。」

「ありがとう。お疲れ様な、リン。」

「はいです……あれ？お客様ですか？」

「さっきなのはちゃんが保護して来た次元漂流者。六課で見習いになってもらう事になったよ。」

「そうですか。」

「…小人が…飛んでる…!?」

「にやはは…、やっぱり驚くよね…。」

「初めまして、リインフォース? (ツヴァイ) 曹長です!」

「みんなは『リイン』って呼んでるよ。」

「あ…は、初めまして、甲野カズキです…。」

ある意味本日一番の仰天イベントに遭遇しつつ、カズキは少し別の事を考えていた。

(この人漠然とだけど、さっきの子に似てる…? そう言えば、なのはさん達も『リインフォースに似てる』とか言ってたような…) 本当に漠然とだが、この『リイン』という人物はどことなくさっきの少女に似ているのだ。

「あ、そう言えば。さっき気絶していた女の子がカズキ君と一緒に運ばれて来たんだけど、その子がリインや『初代リインフォース』になんとなく似てたんだよね。」

(初代…?)

「へえ、ほんまか。その子は今何処に?」

「医務室に運んだよ。」

「そっか。今頃シャマルが戻って来てると思うから、驚いてるやろな。」

「これから様子を見に行こうと思うんだけど、はやくも行く?」

「もちろん!」

「リインも行くです。」

「…あ、もちろん僕も。」

「それならみんなで行こう? カズキ君にシャマルも紹介したいし。」

一行は医務室へ向かった。

第5話 見習い起用(後書き)

ちよつと思つたんだけど…。

カズキ「ん？」

話の進みがやたらと悪いなー…って。

カズキ「文才が無いからでしょ？」

リヨウ「自業自得。」

アイリス「フォロー出来ない…。」

グハア！（ 999999のダメージ）

カズキ「あーあ…。」

リヨウ「まあ…仕方ない。」

アイリス「それでは皆さん、次回もお楽しみに。」

『ドライブ・イグニッション！』

第6話 名前(前書き)

24時間以内に2話投稿という快挙達成！
でも相変わらず短い…。

それでは……

『魔法少女リリカルなのはStrikers ~Hidden
the Fact~』

……… 始まります。

第6話 名前

少女の様子を見るため、カズキ、なのは、フェイト、はやて、リンの5人は医務室にやって来た。

ちなみに、カズキは少女が本気で心配で、なのはとフェイトはとりあえずお見舞いに、はやてとリンは『少女が心配+カズキへのシヤマルの紹介+少女がどの程度リンフォースに似ているのかの確認の為』と、全員理由が異なっている。

「さてと、それじゃ入ろうか。」

はやてを先頭にして一行は医務室に入る。
中には明るい金髪の女性がいた。

「あらはやてちゃん、それにみんなもどうしたの?」「さっきここに女の子が運ばれて来たやろ?その子のお見舞いや。あと、さっき来たばかりの子にシヤマルの紹介をと思ってな。」

「初めまして、甲野カズキです。」

「こちらこそ初めまして、シヤマルです。」

「さっきの女の子はカズキ君が見つけたんよ。」

「偶然ですけどね…。」

「そうだったの…。それにしても、あの子の顔つきってなんとなくリンフォースに似てなかった?」

「シヤマル先生もそう思います?」

「私となのはも同じ事を考えてたんです。」

「僕も、さっきリンさんと会った時にそう思いました。」

「そんなに似とるんかいな。」

「見てみたいですよ!」

「彼女もそろそろ目を覚ますと思うわよ。」

そして、シャマルを含めた全員が少女の眠っているベッドに向かう。

「おー、確かに漠然とやけど似とるな。顔つきと言つか輪郭と言
うか…。」

「ホントですな。」

「でしよ〜!」

なのは達が『顔』についてやたらと盛り上がっていると、渦中の少女が目を覚ました。

「……………ん。」

「あ、目が覚めた？」

正直『顔』の事なんかどうでも良かったカズキが真っ先に気づいて声をかける。

なお、目を開けた事で瞳の色が『明るい紫』であることが判明。

「……………あなたは…?」

「僕は甲野カズキと言います。君の名前は？」

「…名前……………」

「うん。」

「……………」

「……………あれ？」

「……………?」

（えええー!?!?）

どうやら彼女は自分の名前がわからないらしい。

「じ、じゃあどこから来たのかな？」

「!?!?!」

(今度は怯えてるし!?今まで何があったのこの子!?)

物凄く気になるが今は触れてはいけないと思い、カズキは質問を変
える。

「えーと、ごめん。嫌だったら答えなくても良いから。」

「……………」

「(よし、落ち着いた。)それじゃ、別の質問をするね。何か持っ
ている物はあるかな?」

「……………」

「え?……………うわ!?!」

少女が手を開くと、そこに一冊の白い表紙の本が出現した。

「本……………」

「あれ?その本……………」

少女が出現させた本に反応したのはリインだ。

「リインさん?」

「表紙が白いですけど、『夜天の書』や『蒼天の書』とデザインが
同じです。」

そう言うと、リインは左手に青い本…『蒼天の書』を出現させる。
とりあえず蒼天の書がいきなり出現した事にはあえて突っ込まず、
そのデザインを確認する。

「本当だ…。全く同じデザイン。」

「……………これ……白天の書……………」

どうやらこの白い本は『白天の書』というらしい。

「おやまあ、ほんまに夜天の書にそっくりやな。」

ようやく『顔談義』を終えたはやてが話に合流。

「ひよつとして、魔法が記録されとるんかな？ちよつとそれ貸してくれる？」

はやては少女から白天の書を受け取ると中を確認する。

「えーと、『ホーリーダガー』に『ナイトメア』に『パンツァーシルト』。ホーリーダガーは『プラッディダガー』みたいな物かな。ナイトメアは解らんし。パンツァーシルトはリンフォースも使ったな。」

すると、いきなりカズキが口を開いた。

「……ホーリーダガーは刃……ナイトメアは砲撃……パンツァーシルトは盾……。」

「か、カズキ君いきなりどうしたん！？て言うか、なんで分かったんや！？」

「……あれ！？僕は今何を言って……！？砲撃とか刃とか、一体何のこと！？」

「カズキ君、一回落ち着いて……。」

「す、すみません……。」

とりあえず深呼吸をして落ち着くと、カズキは再び少女と話し始める。

なお、白天の書は少女に返却された。

「えーと、とりあえず名前が無いのは不便だよね…。」

「良かったら、僕が名前、付けてもいいかな…。なぜだか分からないけど、良さそうな名前が浮かんだんだ。」

「……え…?」

「……『シルビー』なんてどうかな…。」

「……うん…。」

少女の表情が僅かながら笑顔になる。

この光景を見ていた全員がなんとも言えない空気が包まれる中、はやてはかつての自分に起きた『ある出来事』を思い出していた。

『夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る…。強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール…。リインフォース…。』

(これでこの子も、きっと幸せやな…。)

はやては心の中でそう呟いた。

第6話 名前（後書き）

フラグ建設完ッ了！

カズキ「活動報告でのニヤニヤはこれが原因かああああ！！」

まあ『フラグを建設し過ぎてハーレム状態』にはしないから安心して。

というか雰囲気的にこっちが耐えられん。

それに、所詮は非リア充が書いている作品だから恋愛描写がほとんど書けないし。

カズキ「そりゃどうも…。」

その代わりに、『ロリコンに誤解されるフラグ』が建つかもww

アイリス「あ、そう言えばシルビーさんって…。」

リョウ「アイリスほどでは無いにしろ、外見的には年下だったね…。」

カズキ「おい作者ああああ！！」

はっはっは！頑張れ！！

それでは次回もお楽しみに！

『ドライブ・イグニッション！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4007z/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~Hidden The Fact~

2011年12月30日01時49分発行